

あとがき — さいごの童話詩集が生まれた日 —

1

その日は寒さのわりに、薄明の陽がずいぶん明るく見えるのだった。それなのに私はすでに——夕べの訪れを感じていた。自分への、夕べの訪れを、信じていた。そして先程まで自分の眠っていた部屋を、初めて見るもののように感じていた。そこに私が眠っていたということが、なにかとても信じがたいもので、あるかのように。

私はなにを？

いつもなにを、眼のまえに、みつげようとしてきたのだろう。

世界はただ眼醒めるにすぎない。そして決して、その行いを疑いはしない。しかし私は夜明け前の冷たい空気をこのくびすじに感じながら、朝がふたたびやって来ることを、受け入れることができずにいた。私はそれを本当の朝だと信じた。そしてだれも、なにも疑ってはいないのだと、ああ家々や街や樹々や鳥たち、おまえたち。ひとりひとりに、言ってきかせたい。

—— こうして早くに眼が醒めた私は、高い高い窓の下に小さな椅子を置き、そこに腰掛け、いつしか、詩とも童話ともつかない、レトロの街と口笛吹きのお話を、うつらうつら、ゆめみまどろみはじめたのだった。

夢を現実と見まがうのは、幼な児だけではないのだろうか？ それとも幼い頃の記憶が気付かぬ間にそつとよみがえり、ぼくの疲れた思考をさえぎったの？ 子供たちがあんなに唄をうたうのは、なにかを知ろうとしているのかも知れないし、子供たちが今日あったことをあんなにいっしょけんめい話すのは、なにかを確かめようとしているようにも、思えるのだ。

人生とは、ひとつのおとぎ話にすぎないのだから

何も悲しむ必要などないのに――

明日や昨日を想いながら

みんな毎日をすごしているのだ、

時間はたっぷりある、みんな一緒だ

幼い頃のぼくが

つまらなさそうにオモチャを投げる

積み木ががちりと、音をたてる

3

世界は黙し、私たちの背中に手を添え、絶え間なく働きかける。私たちはその大きな手の動きに意志を感じ、その考えを探ろうとする。それが真理なのか、それとも無邪気な幻想にすぎないのか、訝り、疑いながら。

触れられて。

——それはとてつもなく大きくて、気まぐれな手で。

それは私たちをいつくしんでいるのか、それとも実は、

私たちの存在になど、気付いてさえいないのか。

世界は、もう一方の手に一体何を、隠しているのだろう。それを私は訝しみ、その手つきの裏側に見え隠れする何ものかを、知ろうとする。声を発することなく、世界が絶え間なく私の意識に降らせつづけるたくさんの詩句のなかに、それを見つけたそうと試みるのだ。

溢れかえる詩句たちに、溺れ、喘ぎ、ひとしれず、もがきながら。

そんなとき、私は、

自分の眼つきを畏れ、嫌悪する。

このような詩集のためには、楽しく飛び跳ねるようなモチーフを。だが音楽的には、限りなく静かなものを。分かりやすいリズムを排し、アナーペストを引き延ばしたような、戸惑いがちの歩格を。おとなしく、けれど大胆なレトリックを。ゆったりと、ためらうようなりフレインを。曖昧で、懐疑的な擬人法を。ささやくような音調を。

そして、最後には詩人よ、語ることを、躊躇え。

——いまとなつては、詩も童話も話し合うことを終え、ただひとつのモチーフだけを共有し合い、ひとつの不確かな、それでいて美しい様式を取りながら、互いに眼をとじ、黙し、頷いている。

確かに、こうするしかなかったのだ――

5

まどろみから眼醒めると、そのうつすらと碧い部屋はまるで綺麗な色合いをして、それでも別段悲しいとも思わずに、わたしは窓辺の椅子に腰かけたまま、どこまでもおなじ碧がひろがる景色を静かに眺めていた。そのどこかに、物語の続きを探しながら。それは丘のうえの小さな、それでいて果てしなく天井の高い、四角い部屋であった。薄汚れたまるい卓の上には、くりいむいろのコンポートが置いてあった。果物がのつていたかは定かでないが、そのやさしい陶器が、妙に部屋の壁の色になじんでいたのはたしかだった。そしてそれは窓外の、丘の向こうのもっと遠くの、碧い世界とひと続きの、永い永い夢であるかのようにだった。

どうしてそれほど

ひかりが碧がかったのかは

いまでも わたしには 分からない

ただそのときわたしが、

泣きたいくらいに

夜明けを焦がれていたのだということだけは

今となっては

疑いようなない真実であったように思う

わたしはそうしていつまでもいつまでも、

遠くばかりを眺めていたのである。

西暦二〇二〇年一月 須田慎吾



